《研究ノート》

管理と哲学

——村田晴夫『管理の哲学』を読む：哲学的な，あまりに哲学的な管理学観——

裴　富吉

1

このたび，「管理ということを哲学的に解明すること」をめざした，村田晴夫『管理の哲学』（文眞堂，昭和59年4月）が刊行された。

筆者は，この国の経営学界における「哲学・思想」性〔→社会科学的素質〕の貧困をうれい，また経営学という学問の現実的妥当性にとくべつ関心をいだいている。その意味では，村田『管理の哲学』は新鮮な刺激を与えてくれる著作である。タイトルからみてもそうであるし，実際に内容を読んでもそう感じることができた。

しかしながら，村田は，哲学的にすぐれた考察をめぐらせているものの，管理そのものに対する経営学的思索はどうもはっきりしない。村田『管理の哲学』は，哲学書的なふんい気を十二分にただよわせているが，経営学書とみなすに足る十分な内容の展開をみせていない。同書は，あまりに哲学的にすぎ，「管理」に関する社会科学論として物足りなさを感じさせる。哲学的なほどには経営学的でも管理学的でもないのである。

以下，同書のすじ書きにそって，部分的にくぎりながらまとめ，論評をくわえる形式で叙述をおこないたい。

2

「序」。——管理は，人間の主体と客体の問題にかかわり，社会科学の多くの一般的な問題と交差するものをふくんでいる。科学では対象を客体としてとらえ，管理では対象のなかにも主体としての人間をとらえる〔ことが必要である〕（序，ii頁）。

個と全体，これが本書をつらぬいている基本的視点である。この問題をめぐって社会科学には，伝統的に，基本的に対立するふたつの立場がある。

それは，垂直同型性と水平同型性である。前者は，小宇宙としての人間は大宇宙の諸相を，そのなかに映しとって存在するという立場である。後者は，人間の存在を実体として宇宙の中心におき，その主体性のなかで，理性的に，宇宙を客観的にみていこうとする立場である（序，ii-iii頁）。

村田は，社会科学の歴史は，基本的に，水平同型性と垂直同型性の対立・葛藤の展開過程であるという。とくに，C. I. バーナードの画期的な創造的管理論は，これまでの社会科学にはなかった相対的時空観に立脚したものとみる。バーナードの理論は垂直同型性のがわでの統合だとする。それは，実に技術（テクノロジー）でも科学（サイエンス）でもなく，技（アート）なのであり，不断に「未来」へむかう創造であるという。個の利益と普遍的善との調和の問題へのひとつの解答は，プラトンのなかにある（序，iv頁）。

村田はいう。管理というものを権力的なものとしてではなく，われわれが，われわれ自身の社会的全体性を獲得するための統合の意味を創造するものとして位置づけること，これが「管理の哲学」の役割であり課題である，と（序，v頁）。

村田の研究に動機を与えたのは，山本安次郎『経営学要論』（ミネルヴァ書房，昭和39年〔増補，昭和41年〕）と，三戸　公『人間の学としての経営学』（産業能率短期大学出版部，昭和52年）である。村田は，前著に，経営における主体と客体，そしてその統合を学び，後著に，人間の学へむかうべき経営学の課題を学んだという（序，v頁）。

――筆者は，ここで冒頭より疑念をいだく。山本，三戸に学ぶということは，それらのどの著作部分によるにせよ，両者の理論的全体像を的確にふまえたうえでのものであるはずである。ところが，村田の山本・三戸理解はそうなっていない（両説については，とりあえず，拙著『日本経営学史』白桃書房，昭和57年〔第6章「日本経営学説の解明－山本安次郎の経営学説－」〕，および『経営理論史』中央経済社，昭和59年〔第4章「経営学の展開－三戸　公の経営学説－」〕を参照されたい）。

今回の，村田『管理の哲学』は，哲学的に含蓄のある思索をくりひろげているが，経営学的には「経営学書」とみるべきたしかな内実をみいだせない。

3

第1部「全体と個－管理とは何か」〔第1章「管理の世紀」，第2章「管理の歴史的意味」，第3章「『創造的管理論』の創造」〕。

20世紀は管理の世紀となづけられる。1人の独裁者による支配ではなく，人間が人間を管理するための諸機構を生みだしていく社会，そういう意味で，われわれがわれわれ自身を管理する社会である（3頁）。支配から管理へ移行するのである（4頁）。

――筆者は思う。支配と管理は排反的な概念ではない。管理へ移行しても支配関係はのこる。いかなる社会にあっても，「管理する者」と「管理される者」（→人間が人間を管理する!!）の役割分担が存続するかぎり，そこに〈支配と管理〉は共存する。管理問題のなかに支配問題は同心円的に共生するのである。

以上のことは，村田が「資本主義社会における企業の所有と管理の分離」（8頁）を，すなおに認めるにしても，なお当然，明らかなことである。所有と管理〔経営〕の分離という問題

は，根本的に支配問題にかかわるものである。

ここで，筆者のいうことは，「いかなる管理も支配を必要とする，……管理は支配の維持のために必要な手段だとされている（M. ウェーバー）」（42頁，傍点は筆者）ということとは，まったくちがう意味のものである。

支配問題は，いぜん継続する論点である。支配を悪玉と位置づけ，管理を善玉にみがきあげようとする意図がほのかにみえてくる。

全体論的人間主義の管理思想家，M. P. フォレットと C. I. バーナードは，いずれも A. N. ホワイトヘッドの思想に強い影響をうけている。彼らは，新しい有機体主義の思想をうけついで，全体論的人間主義の管理論を打ちたてた。ここで有機体主義の有機体とは，①全体性，②能動性，③過程性からなる（6-7頁，傍点は筆者）。

管理の〔ゆるやかな〕定義。管理とは，もっとも広義の意味においては，全体性の意味をさだめ，個の意味と全体の意味を調和させることである。また，全体性の意味をさだめているもの〔→全体と個の関係において，全体性の意味を創造していくもの〕を「真の管理者」とよぶ（11，12頁）。

管理においては，科学的合理主義の潮流と，全体論的人間主義すなわち有機体主義の潮流とがからみあい，今日，なおその模索のなかにいる（13頁）。

村田はいう。支配をはなれた管理。管理とはなにか。これが本書の追求する課題である（19頁）。

――筆者は思う。そうした課題の設定のしかたじたいに問題がある，と。支配関係をはなれた管理というものが，はたして実在しうるだろうか。想定可能だろうか。

村田は，管理の本質をあばこうとする本質主義的な問い（21頁）を提起する。すぐれた社会思想家は，社会の趨勢を先取し，予料する。したがって，社会思想史における全体と個の解明は，管理への問いに対する鍵を与えてくれるはずである（22頁）。

垂直同型性と水平同型性の再定義。前者は，①全体とそれにふくまれる部分のあいだの同型性，②存在原理において同型である。後者は，①客体化された対象間の同型である，②構成原理において同型である（25頁）。

時代区分。①理性の時代へ：ホッブズの時代〔16～17世紀〕，②社会科学の確立期：スミスの時代〔18世紀〕，③物心の分離：マルクスの時代〔19世紀〕，④ウェーバーによる統合〔19世紀末から20世紀のはじめ〕，⑤管理の歴史的意味〔20世紀の問題〕（26-50頁）。

村田は，課題「管理とはなにか」に対する解答として，つぎのようにいう。

> 全体性をささえるものとしての「真の管理者」を殺した人間が，全体性の秩序をみいだすための手段として，みずからひきうけるべき重荷である（48頁）。

筆者は，「真の管理者」と彼がいうときの，その〈真の〉ということばづかいに留意したい。それは，社会科学的探究において，たえず問題になる「真理追求」とは含意を異にするものだからである。

バーナードは垂直同型性のがわで統合をなしたというべきである。有機体主義の管理のもっとも集約された理論をみせている（52頁）。バーナードでは，人間と協働システムは同型な有機体としてとらえられる。この同型は垂直同型である。協働システムは，人間を部分としてふくむ全体であり，部分と全体のあいだの同型になっている（55頁）。

――筆者は思う。バーナードの協働システムをそのものとしてのみ問うことは，現代の管理問題を分析するための有効な方法だとはいえない。それが「真の管理者」像の創造に有用だというのであれば，話は別であるが。

人間のがわからみると，人間は主体として自己の統合をはたしながら，また客体として協働システムに統合されている（69頁），といわれる管理問題が，経営学的問題の水準にまで高められてはいないのである。そのみかたは，事実を記述するものではあるが，本質の解明にむかうものではない。

村田は，社会的事象の根底のひとつには，人間の行動と道徳があるという（74頁）。だが，その「人間の行動と道徳」が，歴史的・社会的な意味〔→社会思想史的な展望〕において問われているわけではない。歴史的なあつかいをするといいながら，その実，そうはなっていない。「道徳の創造」をする管理者，この管理者としての人間がすなわち「真の管理者」でなければならない。組織それじたいが，みずからの能動性によって，人間を超越し，新しい全体性の意味を創出せしめる。すなわち組織も「真の管理者」となる（81頁）。

村田が「真の管理者」というさいの，「真の」とはなにか。バーナード理論がそれを啓示してくれるというのか。バーナードは「神」なのか。

4

第2部「創造と管理―バーナードの哲学」〔第4章「バーナード理論」，第5章「バーナードにおける科学（サイエンス）と技（アート）」，第6章「バーナードの問題」〕。

山本安次郎とバーナードは同じ哲学に立っている。人間は，主体と客体の統合体である，そして協働システムも，また同じように，主体と客体の統合体である，というのがバーナードのみかたである（86頁）。

――筆者は思う。山本説とバーナード理論が同じ哲学に立つという判断は，表見的な見解である。村田は，山本理論（→行為的主体存在論〔西田哲学的経営学論〕）の哲学（史）的・思想（史）的背景をよくしらないようだし，またその歴史的・時代的な展開のようすもしらないかのようである。表むきの論理（ロゴス）の構造が同じだからといって，それらの根底にひかえるパトスおよ

びエートスをよくつかまずに，村田のように断じることはうかつである。社会思想史的把握をいうなら，なおさらそうである。この関連でいえば，村田は，山本説を哲学的に解明していない。このことは，バーナード理論に対する彼の説明にくらべれば明白な相違である。これでは両者をならべて透視できないことになる。

村田はいう。管理は，協働における「現在」に，つねに「未来」を予想し，それを「現在」において生かすことを基本とする。管理者は「現在」と「未来」の連結点にとどまるのである（92頁）。

――筆者は思う。これはひとまず至当な解説である。だから，経営学関係の科目に「管理論」＝「政策論」科目が多くある。「現在」は「原理」的課題であり，「未来」は「政策（論）」的課題である。しかし，その必然的な傾向だが，そのふたつの課題をひとつにむすびつけ，統合しようとする方途は，管理に関する主張を規範理論化させやすい。

協働システムの目的〔組織目的〕は，人間の主体を客体化する運動の動因である。したがって，人間からみれば，それは「未来」において手段に転じるべきものである。いわば，組織目的は，人間にとっては，その本質において，手段なのである。それを混同することが，目的－手段の転倒である。ほんらい，手段であるべきものを目的と思いあやまる誤謬である（92-93頁）。

――筆者は思う。経営学という学問の名のもとに論議されている管理問題に，組織「目的－手段」に関する，そのような本質観をつきつけることは非生産的である。組織目的は，とりあえず人間にとっても，その経済〔あるいは社会〕単位体にとっても目的なのであり，それを，その本質において「人間にとっては」手段なのだといったところで，本質的な事態はなにもかわらない。このことは，管理政策論的見地の倫理的解釈にしかならない。

村田は，バーナードの主張に関して，有効性（effectiveness）〔→客体のがわの評価尺度〕と能率（efficiency）〔→主体のがわの評価尺度〕にふれる。能率は「未来」にかかわるという（96-97頁）。

ここで，主体のがわにかかわる評価尺度＝「能率」とは，垂直同型性の関連でいわれる「主体」の問題である。これは，組織の目的と個人の目的が，全体と部分のあいだの同型性，存在原理において同型である，という前提においてこそいえる主張である。

しかし，そうした主張は，「未来」への願望としていわれるべきものではなく，現実的・経験的な関連において判断されるべきものである。

村田はいう。協働の「現在」においては，協働システム内の人間は組織人格化され，客体化されて，組織主体によって調整されている。しかし，協働の「未来」においては，人間は組織人格ではなく「個人人格」として，主体性を回復し，動機を満足させる，そしてそれによって，自己を客体化する契機を獲得する（104頁）。

――筆者は思う。すると，「現在」の管理のなかに生きるほかない人間は，「未来」の管理

に夢をかけて生きることになる。より現実的に考えたい。資本主義的経営，ここでは日本の企業，そのなかにいる従業員→人間の「現在」と「未来」を考えよう。結局，「現在」の管理のありかたは是認されるほかない。そこでなにか問題があれば，その解決・解消は「未来」の管理にかけよ〔!!〕ということになる。

こういうと，筆者は，主体と客体をあえて別離させる者だとも論難されそうだが，そのような反論を用意させる「主体－客体」論そのものが分裂的思考なのである。

村田はいう。細分化された目標－手段の連鎖は，組織全体の目標にむかって綜合されねばならない。こうして，全体への統合の過程ということが，組織の有効性の側面についても，結局は，管理過程の本質としてはいってくるのである（107頁）。

だとすれば，「全体への統合の過程」に「人間の主体－客体関係」がくみこまれてはじめて，人間の主体性は生かされるのであり，その逆ではない。村田は，経営学における組織論や目的論の研究成果をしっかり活用していない。彼のいうところに，かくべつ目新しいものはない。すでに分析され説明されつくしているものばかりである。

哲学することは，これが現実に対峙する哲学であることを意味する。哲学のための哲学ならば，そもそも哲学とはいえない。

村田の前段のような把握は，もう一度，現実の経営問題のなかに投入され吟味されるべきである。

村田はいう。現在－未来の連結点にふたつの道への分岐点がある。ひとつの道は，客体化された目的が優越する道であり，ほかは，主体性を回復する道である。バーナードの意図は，究極的には能率への統合，すなわち主体性の，また垂直同型性のがわでの統合である。道徳の創造は未来の創造なのである（116-117頁）。

――筆者は思う。問題は，はたしてそのような企図の実現が，われわれの生きている現実のなかで可能かどうか，またバーナードのそうした主唱がいかなる状況のなかから生まれてきたかを問うことにある，と。村田の「管理の哲学」は「哲学の管理」に変質しかかっている。

科学（サイエンス）と技（アート）。科学は，そのつつしみぶかい美徳を最後まで維持して，付加的手段としてのみ技（アート）を助けるのである(119頁)。バーナードは，みずから培かった協働の体験と，管理者としての行動知を理論体系として言語化しようとしたのである。彼は，科学（サイエンス）と技術（テクノロジー）と技（アート）を区別している（121頁）。科学は普遍的な説明，技術は有効性，技（アート）は具体的実践にかかわる（122頁）。

バーナード理論の真髄は，組織の「未来」の創造にある。バーナード理論は科学をこえたものへの志向をふくむ。それは，科学よりも技（アート）を語り，哲学を語ったのである(122-123頁)。

組織の均衡は，協働の「現在」と組織の「未来」との均衡を基本としている。まさに，ここに，組織の科学から管理の技（アート）への連結点がある。そうして，技（アート）としての道徳の創造は，過

去の説明ではなく，未来の創造であり，規範なのである（130頁）。

――筆者は思う。経営学者は「未来」の問題→規範にいかに対処すればよいのか，と。経営者の役割と経営学者の役割は明らかにちがうから，なおさらのこと，そのように問いたいのである。これは，バーナードが「経営者」体験を「蒸留」し，同時に彼が「経営学者」としてそれを哲学化したとしても，いぜん問われるべきことである。バーナードが経営学者であるとき，彼は経営者ではない。おのずと「道徳・未来の創造」や規範への対処法は異なるはずである。

「道徳の創造」という観点が未来の創造→規範〔という現在へ，さらにまたここから未来の創造〕へ収斂していくものであれば，その両者（経営者と経営学者）の役割におけるちがいは分明にされねばならない。経営学者はあくまで学者であり，しょせん経営者ではない。

経営学者は，バーナードのいうような「意思決定とは，結局，全体を感得する技（アート）を基礎とした綜合的なもの」（133頁）をになう経営者の役割を，「説明する」という可能性を与えられているにすぎない。経営学者がただちに道徳や未来を創造できたり，規範を樹立できたりするのではない。経営学者はたかだか，そうしようとする経営者の主体的行為とこの存立基盤を，解明しようとするにとどまる。いままで経営学者がなしえたことは，その範囲をこえない。

村田はいう。管理の技（アート）は，科学を付加的な手段として，綜合し，創造する過程であるがゆえに，二分法〔公式組織と非公式組織，有効性と能率など〕にもとづく分析は，綜合へと転化されねばならない（143頁）。

――筆者は思う。経営学者は，問題を綜合的に観ることはできても，経営者のように綜合的に行為しうるのではない。学問的実践の意義はなにか。そのちがいを，しかとみてとらねばならない。

5

第3部「方法と意味」〔第7章「方法論的個人主義の系譜」，第8章「方法論的有機体主義へ」，第9章「統合の視点」〕。

社会科学がもつ固有の問題，見る者が同時に見られるがわの一員であるということからだけでも，主体と客体を截然と分離するような方法だけでは十分とはいえない。むしろ，主体と客体の統合的存在ということのなかにおいて，社会の諸現象をとらえねばならない（175-176頁）。

――そのとおりである。だが，経営学者＝「見る者」，経営者＝「見られるがわの一員」という基本的関係は歴然としている。この壁をのりこえる手だてが哲学的観想かもしれない。しかし事実は両者にこえがたい壁があることをみせつけている。

村田はいう。テイラーからバーナードへの転回は，またカントからホワイトヘッドへの転回でもある（179頁）。

われわれは経験をとおして成長する。人間は思惟という経験をとおして，昨日の自己ではない今日の自己を獲得する（187頁）。

――筆者は思う。「思惟する者」（187頁）とは，「経営学者」と「経営者」にとって別様の意味がある。学者は哲学するために思惟するのに対し，経営者は行動するために思惟する。学者は「思惟する者」として，「思惟する者」である経営者をも思惟する対象にする。

村田の関心は，「人間と協働システム（あるいは社会）における全体と個の調和の問題」（190頁）にある。

経営者〔管理者〕のほうは，組織・社会における「全体と個の調和の問題」に直面している。技（アート）が前面化する状況下に生きている。経営学者のほうはその問題を議論する立場にある。このちがいは大きく，こえがたく映る。

村田はいう。ホワイトヘッドの人間観は，バーナードの人間観に対する十分な哲学的基礎を与えている（197-198頁）。テイラーは，水平同型性の思考にもとづく科学を，そのまま人間主体へふりむけようとした。そこに，垂直同型性への無意識の接近がかくされていた。フォレットがそのかくされた芽をのばし，そして垂直同型性の土台に接続した。その土台こそ，ホワイトヘッドの有機体の哲学にほかならなかった（204-205頁）。

村田が管理とよぶものは，つぎのとおりである。――人間と協働システムは同型なのである。そして協働システムは，それが統合的な有機体として生きていくためには，個々の人間を客体として調整的に，しかもその調整が各々の個人にうけいれられるように，統轄していくことである（209頁）。

――筆者は思う。これは，管理の理想的な状態を意味する。しかし，なんのために，そのような「管理」〔の理想的な状態〕が必要とされるのかを考えてみなければならない。村田のいう「管理」は，無色透明の，体制無関連的概念である。それは，すべてを語りうると同時に，なにも語りえない。

さて，ここで，例の「真の管理者」が登場を許されたとしても，さらにそれがどのような状況下にあるのかを検討しなければならない。まさに，社会科学的な課題が出てくる。村田が問題にするのは，「管理〔の理想的な状態〕」や「真の管理者」ばかりであり，それ以外のものは眼中にないようである。

たしかに「管理」問題は，ギリシャの昔からの問題である（211頁）。けれども，「社会科学の発展の力学的構図」（211頁）のどの段階において，「管理」問題が重要性をおびてきたのかという論点をぼかした《哲学的「管理」学論》は，いささかならずも空虚である。なにゆえ20世紀になって「管理の歴史的意味」が問われているか。

村田はいう。水平同型性は説明的であり，垂直同型性は了解的である(213頁)。バーナード理論の後半，つまり管理論は，科学的説明ではなくて，解釈学的了解なのである。それは，認識と存在のあいだをつなぐものである(214頁)。解釈学は，了解という自己の満足をとおして了解者に活性を与え，実践へとむかわしめる直接的契機をもつ。技(アート)は具体的なひとつひとつの実践なのである(215頁)。ここに，科学の機能としての説明にはなかったところの，解釈学の実践的な了解という方法をしることができる（217頁)。

人間とは，主体であり，そして客体であり，その主体と客体とを統合して，自己を超越していく存在である。これが，ホワイトヘッド，またバーナードの人間観であり，本書がとった基本的立場であった（229頁)。

村田の結論は，意外と単純かつ平坦な地平にたどりついている。

6

過去，この国においては，了解の方法→解釈学を駆使したつもりの学者が，反動的・観念論的な倫理学や哲学を産出したことがある。解釈学は，認識と存在のあいだをつなぐものどころか，認識をもって存在を曲解〔了解？〕しやすい特性をもっている。村田のいう「真の管理者」論は，抽象度の極めて高い仮構概念に立脚している。それは，解釈学的な了解にもとづく「管理〔の理想的な状態〕」論に対応して造形されている。観照的規範論の性格すらうかがえる。

村田は，個の利益と普遍的善，これこそ管理の問題の出発点であり目標点でもあるという（238頁)。

だが，「社会からそれが遊離しているようでは意味がない」，「すなわち，社会科学は社会そのものとの間にしっかりしたコミュニケーションのつながりがなくてはならない」（230頁)という点では，彼の主張における《出発点》と《目標点》をつなぐ「管理学」の中身＝道程が，少しも明らかになっていない。

「社会の実践への参与」（231頁）とは，いったいなにを意味するものなのか，いぜんわかりにくいのである。これは，解釈学的立場の限界である。了解はあるが説明が足りない。

村田は、自由と必然のはざまで人間が歴史をきざみいくことができる道，これが管理というものであり，いかにしてこれを調和的に達成することが可能か，この問いに対して，現代の社会科学徒は立ちむかっていくべく強いられているという（241頁)。

とはいえ，そうした重大問題への挑戦に答えるために，「解釈学の有用性に訴え」る(240頁)ことはむりじいである。「解釈学的に探究すること」（240頁)は袋小路につきあたるほかない。

個の利益と普遍的善は管理の出発点・目標点だというのであれば，この論点をさらに具体的に哲学化すべきである。現実的課題をしりめに，哲学的観照にふけるのは罪というもので

ある。

要は，「存在の認識」においてではなく，「認識の存在」的なありかたにおいて，村田『管理の哲学』は，「管理と哲学」のつきあわせが確実になされていない。

そもそも，問題の設定に破綻があり，また現実的関連の配慮に不備もあって，論旨の展開では具体性が不足している。哲学的であることの意味が，それでは減殺されるはめになる。哲学的に思考することは，抽象的かつ具象的でなければならない。

村田『管理の哲学』は，「哲学」問題については，「解釈学の有用性」過信におちいっており，「管理」問題については，あまりにも非経営学的である。したがって，両問題の結合が，生産的な成果をなにももたらさず，たんに哲学的な抽象観念の奔放に終始している。

体制問題ぬき，歴史段階問題ぬきの「管理」哲学論は，結局いきづまることになる。この点については，村田の著作につづいて公刊された，鈴木幸毅『バーナード理論批判』（中央経済社，昭和59年5月）をあわせて読むのがよいかもしれない。

7

村田の『管理の哲学』にも，以下の記述が妥当する。

> すなわち，日本の現実分析の中から理論を作り出し，あるいはそのための道具として西欧の理論も摂取し必要に応じて加工，修正し，そしてその理論で社会の現実を分析することによってその理論の有効性を検討するというフィードバック機能が作用しない点が問題である（石田 雄『日本の社会科学』東京大学出版会，1984年，229頁）。

> わが国の経営学が輸入された学説からの演繹が主流であってわが国の実態からの帰納が不足している（藤森三男『定性要因による経営分析』有斐閣，昭和58年，序文，iv頁）。

村田は，欧米学者の理論分析・批判にはくわしい。が，日本の経営学者の主張の把握は十分にはたされていない。彼は，欧米理論は批判的に吟味するが，日本の諸説は鵜呑みにする。また，日本の現実をふまえた「管理」〔の哲学〕論にもなっていない。あっても思いつき程度のものである。

『管理の哲学』は，哲学的な，あまりに哲学的な管理〔学〕観であり，あまりに「哲学的」的である。

おそらく，つぎの叙述は，村田の構想の域外にあるものと推察される。

> 個人と集団の両面で労働（仕事）の世界を復権することは，近代を支配した効率原則をしりぞけて，ゆっくりとおちついた社会生活の建設につながる。生産力の上昇を絶対化することの悲劇的な結末を知った私たちは，自然と人間に対するふるまい方を根本から考えなおす時を迎えている（今村仁司『批判への意志』冬樹社，1984年，205頁）。

そこには，村田「管理の哲学」的視点とかみあわない問題が現われている。

1984. 8. 5

《追補》　本稿，初校中，『日本経済新聞』（1984年11月3日）に，つぎのような記事があった。――「村田晴夫『管理の哲学』（文眞堂）は狭義の経営学の立場からすれば推薦に値するものの，主題は永年にわたりいろいろ論じ尽くされた感じのものであった」（第27回日経経済図書文化賞〔隅谷三喜男稿〕「総評」より）。

（べえ　ぶ　ぎる　経営学原理専攻）